

学童期の子どもを見守って思うこと

佐藤 周子

去年、人数オーバーで学童保育「こどもの家」にはいれなかった四年生の子どもたちを、約一年間、ボランティアでみたことがあった。公民館の図書室を借りて、女児二人、男児三人の五人のやんちゃさん。見守るボランティアは、未就学児童とその親の「なかよしひろば」の賛同者と、公民館に出入りする誰でも関わっていただけるように呼びかけ、二時間ごとに二人で見守るように組み込んで対応した。

春休みから始まった朝七時から夕方七時までの長い時間、今にして思えばよくやった、の一言に尽きるが、子どもも、大人も、この形で実施するのは共に初めてなので、怪我をさせずに終えられるだろうかという緊張感とともに、ものめずらしいこともあった。

公民館に来られる男の方は、子どもにとって大歓迎で、お願いしては近くの沼などに一緒に連れ

て行ってもらった。外出に連れ出すには、年配のおばさんボランティアの手に負えないことがわかったからである。いつも五人がまとまって行動するわけもなく、走ったり学校の校庭に寄ったりと、ばらばらになるととても目が届かない。

子どもたちは天下泰平、思う存分外の空気を吸い、散歩以上の体力を使って満足していた。

この楽しみは春休みで終わり、後は外に連れ出す男性のボランティアがいなくて実施できなかつた。

その代わり、公民館の広いホールで卓球やバドミントンなら、と言うおじさんがいて、子どもたちは大喜びであった。スポーツに興味を持った子どもも出て、学校の卓球大会で、初めて優勝したと喜ぶ女児も出た。

夏になると、子どもたちはクラブやプールでの水泳など、学校で運動してることが多くなり、運動した後は、公民館のなかで落ち着くことができるようだった。

秋になり、農産物が豊富になると、農業をやっているおじさんやおばさんが、いろいろなものを提供してくださり、公民館の前で楽しく時間を過

ごすことができた。

例えばある時は、とうもろこしや枝豆、さつまいも、じゃがいも、などなど煮る、焼く、蒸す等、手作りかまどで体験。採りがけの美味しさがわかり、腹いっぱい頬ばる姿は本当に見ていて楽しかった。子どもたちは食べる以上に、かまどに入れる薪割が大好きで、怪我しないように足の開き方、鉋や鉞の下ろし方など、教えながら進めた。

初体験に子どもたちの興味は最高潮になり、支える大人も一緒に興奮するのだった。こんな野外キャンプのような場を、公民館のひろばでできたのだから、感謝である。

冬には雪かきして積上げた雪の山に、穴を掘り、そのかまくらの中でお弁当やおやつを食べて有頂天になっている。子ども達にとって、こんな遊びができることは最高なのだと思う。

室内においても、公民館のように広いホールを利用できたことは子らにとって幸せであった。但し子ども達は、決められた遊びでは飽き足らなくなっていた。卓球やバドミントンやボール蹴りをしていうちは良かったが、回転椅子に腹ばいになって乗り、広いホールの端から端まで蹴りな

がら走り回るようになった。体をぶっつけて怪我しないよう注意するが、それ以外に床に傷つかないか気になって、これは結局、施設での遊びには相応しくないので止めさせた。

以後、子達は次々と想像を絶する遊びをすることになる。

舞台の上上がり、垂れ幕にぶらさがったりしたので、舞台の上にはのらないこと、にした。すると舞台袖の小部屋に入り込み、暗い中であきもせず長時間、くすくす笑ったりひそひそ話に興じている。張り紙には「なかにはいらなないで」とある。どうしたものか？

間もなく、四年生になると身体的にも注意を、との情報もあり、そこも立ち入り禁止にした。

今度は、広い空間のみのホールでかくれんぼをするという。探しに来てね、と言うので、何処も探すところなどないのと思いきや、ソファの下や、ドアのカーテンの中、窓のカーテンの陰などに潜り込んでいる。小さな女の子がどうやって高い窓に上り、狭い窓のふちに潜んだのか、運動神経のよい子とはいえ、感心するばかりである。しかし窓枠にあがるのも危ないから禁止した。

子供たちが好きなものにピアノがあった。自由に貸してもらえたのだから大喜びであった。よく連打して弾いていた。次々に遊べる場がなくなっていくたが、子どもらの工夫は続いた。明るいところのかくれんぼに飽きると、ホールの電気を消してカーテンを張り暗くして、また探しに来てという。探す順序を示されて歩くと、奇声を発してカーテンや椅子の下から飛び出して来る。こっちも驚いて怖がると喜んでゐる。やがて誰もいないはずのところからピアノがポーンポーンと鳴っている。えっ、どうしたの？ と不思議がると自分が考えたと自慢気の男児。こんなことがあってある日、後始末をしないで帰った後ピアノを片付けようとしたら、ピアノの鍵盤に紐が結びつけられている。こうして隠れたところから引っ張っていたのだ。これは大変、公共施設の使い方を話して、このままだとピアノも禁止になるよ、ということにしたのである。

公共施設での使い方を守ることが解っても、つい面白いことには勝てないのだろう。舞台に上がり、緞帳によじ登り、刺繍を傷つけ、引き裂いてしまったことがあった。さあ大変、緞帳はかなり

古いものの、寄贈されたものでその名前が刺繍されている。それに足を掛けたものだから、錦糸がぐちゃぐちゃになって、布自体も引き裂かれるという、公民館の一大事になってしまった。親たちと相談し、夜一緒に集まって修繕したことがあった。規制を破った結果に対して、子らに謝らせた事件の一つであった。

子どもたちの遊びの想像力が、良いほうに発揮され、脱帽したことがある。公民館の活動でホールが使えない雨降りの日、狭い図書館で体をもてあました子らは、新聞紙を利用して、テントを作り、扇風機を中に入れてお弁当を食べ始めた。

それは、積んであった新聞紙を細くくくる巻いて支柱棒をたくさん作り、組み立て、新聞紙の屋根を掛けたのであった。素晴らしい仲間の共同作成に拍手喝采である。

この活動は、行政が対策を講じたため、一年で終わった。

母親が働かざるを得ない現状と、核家族世帯が多くなっている現在、子達は学校から帰って親がいなければ、学童保育施設が居場所になる。友達がが大勢いることはとてもよいことである。が、エ

エネルギーを発散できる運動が可能なスペースが、それらにあるのだろうか。否である。この仕事に携わって初めて知った現実には、子ども達は狭い場所に押し込められているということであった。このことについて問題にするべきだと強く思い知ったのである。

たぶん親は感じていても声を上げられない立場なのか、あずかってもらえればと目をつぶっているのだとも思える。結果的に学童の子どものことを真剣に考える人がいないこと、あるいは仕組みがないことがどうしても気になるのである。

広い場所で遊ばせるために、校庭の開放、地元公民館の利用は解決可能だと思うので、自治公民館の開放の呼びかけ、町の施策の方針、職員間の方針、親の理解と協力、ボランティアの協力など、連携体制について検討が必要と思う。

まず、子育てひろばをボランティアで開催している町内三つの団体で、子どもの子育て環境の実態を知るため、お互いのひろばと、学童施設の九箇所を視察することにした。

結果は五箇所の学童施設のうち、新旧の施設の違いはあっても一施設に学童が三十人から七十人

が入り、四箇所では外で遊ぶことが出来ない悩みを保育士が話しており、すし詰め室内での運動不足が懸念された。いても立ってもいられない気持ちとはこのことで、過日役場が主催した地域づくり座談会で、町の学童の子育て方針と、地域の関わり方を質問した。答えは国の方針がないこと、あるのは学童一人当たりわずか一・六平方メートルの面積が基準で、怪我させないことなそうである。学童保育がこのままでいいはずがない。先ず子育て関係者と関心ある人に呼びかけて、情報交換し打開策を検討してみたいと思う。

学校から帰った子達が、ゲーム機に頼らず、友達と遊べる安全な居場所があり、それにかかわる大人たちも一緒に楽しめる、そんな子育てができるというなど思う。

自分で育てる野菜の魅力

佐藤 周子

八月の暑い日、仙台の義弟が仕事の帰りに泊ま
って行った。お土産に野菜をあげたことから、直
ぐ、妹から「美味しかったよ」と電話が入った。
その野菜は、我が家の家庭菜園から採れたものだ
が、そこは植えたものの、草取りが追いつかず、
スベリヒユなど雑草に覆われた中から、じゃがい
も、きゅうり、なす、トマト、ピーマンなどを収
穫したのだった。妹いわく、「忙しいのによくやっ
てること、認知症になる暇なんかないでしょうね」
とにかく喜んでくれたので嬉しかった。

定年前の夢の一つは家庭菜園で、野菜や花を育
てることだった。腰痛がないときは、よく精をだ
して楽しく働いたものだ。今でも雑貨店を営む友
人から、前年の種をもらっている。周ちゃんなら
活用するでしょうと、私一人で植えられないくら
い一杯くれる。今まで、震災地や子育てひろばの
畑に使い、ほかにも出会いのある、いろんな人達

にあげてきた。

今年地元小学校の子ども教室でも、畑を借り
て植えたいというので、とうもろこしの種を袋ご
とあげた。小学校の脇の畑には、とうもろこしが
背の丈くらいに伸び、順調に育っている。案山子
も作り、からすや、狸に取られないよう工夫して
いるが、うまく成功すればいいと思う。

料理教室の仲間にも、買った野菜ばかりでなく、
自分で作った野菜の美味しさや、収穫の喜びを味
わって欲しいと、種を分けてきた。以前にやって
いた農家の人たちとの講習会は、新鮮な野菜に困
まれての料理作りだったが、今やっている料理教
室は、農家が少ないので、購入野菜がほとんどだ
から、新鮮さを取り戻すため、先ず野菜を水に浸
けているのが悲しい。

これもまた七月末の蒸し暑い日、ある用事で、
北上川東の農村地域に、十軒くらいの家を訪問し
た。ほとんど農業を営みながらの公務員退職者の
家であった。

広い屋敷をきれいに草取りしてあり、農家の心
意気を強く感じた。産直に出している農家の方か
ら、食べきれないからと、採れたてのナスとズツ

キーンを沢山いただいた。

つやつやと輝くナス紺色の美しさ。かぼちやの仲間の濃い緑色の細長いズッキーニ、これは広い畑がないと育てられない贅沢な野菜である。連絡もなく突然行った私たちに、気持ちよく分けて下さるなんて……。

ふっと、かつて農村現場で生活改善の仕事をしてきたときのことを、懐かしく思い出した。それは農家が持参した、立派にそだった新鮮な農産物を利用して料理講習をし、健康料理を食べながらこれからの農村について、話し合ってきたことである。

あれから十何年後の今、公民館で、畑で採れたものを無駄にしないため、また手作りの良さを見直すための、農産加工の講座を受け持っている。例えば、桜の花漬け、減塩梅干、ゆかり、しその葉漬け、梅びしお、砂糖代わりの甘い塩麴、焼肉のタレ、しそ巻各種、ゆずみそ、ズッキーニのスタミナ漬けなど、季節の農産物にあわせ、講習を楽しくしている。購入食品を良しとしてきた各年代の人たちだから、公民科の講習会として、取り上げてもらっているが、とてもやり甲斐を感じ

ている。

農業する人たちがどんどん減少しているため、食べるものは輸入に頼らざるを得ない。海外からの輸入品が氾濫し、小麦やとうもろこしなど輸入穀物は保管中の虫食い防止に収穫後に大量の殺虫剤の混入がある、いわゆるポストハーベスト農薬の使用の心配、特にアメリカ産のかんきつ類に新たな使用が認可、など。

また食品添加物の多用と、輸入国側の基準にあわせた規制緩和、食物アレルギーの多発など健康の不安に直面している。

そして最近大きく問題になった国内での食品の偽装や、中国で発生した鶏肉や牛肉の消費期限切れ、変色した原料を混入した問題、不衛生な取り扱い、アメリカ産食用肉は、飼育の過程で飼料に抗生物質を使用しており、安価なため輸入量が増加していること、遺伝子組み換え食品の不安、特に今アメリカでは小麦粉のグルテン過敏症が問題になっており、日本でもお米食が減り、粉食が多くなっているのが影響が心配されるなど、食品の安全に対する不安と、健康の問題は山積している。この現実には、講習会では人の命（健康）を守る

食糧を生産する農業の大切さを訴えている。農業の強さといえば、ある日、知人からかかってきた電話で、農業国ルーマニアでの生き方について話が及んだ。

アメリカの大学で仕事をしている娘さんの婚約者は、実家がルーマニアで、実家の両親から招かれて、一週間そこへ滞在してきたという。感激したのは、その農業国の、食べ物美味しいこと。野菜サラダにドレッシングは必要なかったほど、そのままの味が美味しかったという。

知人は横浜で暮らしているので、余計そう感じたのかもしれないが、農家の採れたては、ここでも人を感動させるほどの魅力があるのだと感じた。

二十年以上前から、農家のお嫁さんたちの、農家離れとか農業嫌いが話題になっていた。お姑さんが作った野菜がたくさんあるのに、買ったものしか食べない、という悩みが多かった。忙しいと思って、畑から採ってきて、台所まできれいに置いていても、食べてくれないというのだった。

お嫁さんに聞くと、珍しい野菜が欲しいし、買ってみたいとお金ではないという。そのお嫁さん達に、いつか早く、作った野菜の美味しさがわ

かってくれると良いな、と話し続けてきた。それが最近になってうれしいことがあった。これまで農業に関心のなかった、かつての嫁さん世代のボランティアの仲間が、「ちょっと、周子さんに喜ばれることがあるよ」という。何かと思ったら、「もらった種をまいたらさ、きゅうりは成るは、トマトも赤くなつてさ、孫たちが草だらけの畑に入っ

て食べていたったのさ」とおしえてくれた。ああ、やったあ！ と思った。一人でも物を作る喜びがわかればしめたもの。その孫たちは、ひろばに遊びに来ていた三人兄弟である。こうしてどんどん、自分の手で育てた野菜の美味しさが、広まればよいと思う。

野菜の美味しさから、農業の大切さを理解する人が増えるといいと思う、この頃である。